

## 服部南郭の白詩受容について

宮崎 修多

1

江戸古文辞学派の領袖ともいうべき服部南郭（一六八三～一七五九）が、中唐の詩人白居易からいかなる影響をうけたか、ということについては余り包括的に考えられたことはないようである。それは師の荻生徂徠の教育における、宋詩ほどではないにせよ、中晚唐詩に対するなかば否定的な見解が、門生らをしてそれらと一定の距離をとらせていたと想像させるからであろう。少し後になって、むしろ反古文辞の鼓吹者たちによって白居易の再評価が行われたことは、既に文学史の語るところとなっている。

日野龍夫は、部分的にはあるが南郭と白詩とを繋げる発言を残している。すなわち、この学派が叙事文を重んじたこと、楽府題などにみる閨怨・宮怨の詩を通じて個人の恋情を詠じることを模索し始めたこと、この二方

向から、叙事的な長篇「長恨歌」への傾倒、そしてそれがかれの「小督詞」作成へと連なった過程を想定してみせた。

すなわち恋愛詩を詠ずることの楽しさに覚醒した南郭が改めて「長恨歌」に対した時、近体詩が普通である樂府題の恋愛詩とは趣きを異にする、長詩の恋愛詩の魅力を再発見し、折からの文章における叙事趣味からも示唆を得て、物語風の恋愛詩に挑戦してみた、というのが、「小督詞」の成立の由来であつたろう。

〔近世詩壇と白居易〕、『白居易研究講座第四卷』平成六年勉誠社

宮詞や竹枝詞の短編では満たしえない、いわば散文的叙事詩の器として「長恨歌」を応用したということになる。これは当代古文辞派の学風詩風から考へてありうべき状況といつてよいが、南郭個人は白詩に対していささか違う姿勢をとつていたことを、自ら語つていた。

一白樂天ノ詩ノアシキコト、誰モ云コトナレドモ、長恨歌ナドノ如キ、古事ヲ用ヒテ上ヘアラハサズ、ヨク明白ニシテ、シカモ情ヲ失ズニ作レルハ、千秋ノ絶伎、元瑞モホメタリ。小督詞樂天ニ擬シテ見テ、初テ樂天ノ及ガタキコトヲ知りタリ、ト南郭語ラレケル。

〔『文会雜記』卷之一下〕

一白樂天ノ詩至テ上手ナリ。一變シテ一流ノ詩ヲツクレリ。樂府ナドノ事情ヲ云タル処類稀ナリ。長恨歌ヲ傑作トスルモ、フマヘアルコトヲ、古事古語ノ上ヘアラハサズ作レリ、ト南郭語ラレケリ。

ここで「長恨歌」や自作の「小督詞」に言及してはいるものの、かれの眼はむしろ、典故を詩句の上に表出させずしてよく詩情を陳べたという「千秋ノ絶伎」の方に向けられていて、これはどこまでも実作家としての視線というべきである。湯浅常山に「南郭ハ博物ナレドモ、博物ヲ外ニ出サヌ人ナリ」(『文会雜記』卷之二下)と言われたかたならではの、共感に満ちた評価のしかたともいえよう。

2

しかしそうしたさりげない手法への敬意だけだったのか。南郭と白居易との関係に気をとめるようになった契機は、たとえば次のような作品に触れたときである。

白賁墅四首(其三)

郊雲深処静簾前 郊雲深き処 簾前 静かなり

細雨霏霏春可憐 細雨霏霏として 春憐れむべし

已老松杉看改色 已に老たる松杉は 看るみる色を改むるも

新栽竹樹更生煙 新栽の竹樹は 更に煙を生ず

家貧不羨山陰墅 家貧にして 山陰の墅を羨まず

酒薄難招林下賢 酒薄くして招き難し 林下の賢

頭白事閑幽意足 頭白く事閑にして 幽意足る

悔同塵俗誤芳年 悔ゆらくは 塵俗に同じうして芳年を誤まつことを

〔南郭先生文集〕四編卷二 \*宝曆七年七十五歳作

白貴墅は南郭が晩年になって建てた、渋谷羽沢の別邸（本宅は芝赤羽の芙蓉館）。諸侯やその陪臣らとの交流に忙しい本宅にはない安らぎをこの別墅に求めたことは、ここでの平静な詩情に満ちたいくつかの詠作を見ればわかる。さて、この詩の典拠を列挙することはそう難しいことではない。

・虎溪閒月引相過 帶雪松枝挂薜蘿 無限青山行欲盡 白雲深処老僧多 （積靈一「題僧院」、『唐詩選』）

「白雲深処」が一般的な用字で、それを江戸の西郊ということで「郊雲深処」と捻った。しかし「郊雲」としても唐詩などに用例が無いわけではない。さらにいえば、「白雲」を避けたことで仙境の気配は薄らぐ。

・…簾前春色応須惜 世上浮名好是閒 西望郷関腸欲断 对君衫袖淚痕斑

（岑參「暮春虢州東亭送李司馬婦扶風別廬」）

・東望望春春可憐 更逢晴日柳含煙… （蘇頲「奉和春日幸望春宮応制」）

その春の愁いのなかで「細雨霏霏」としてふる例。

・ 春愁南陌 故国音書隔 細雨霏霏梨花白 燕拂画簾金額 盡日相望王孫 塵滿衣上淚痕 誰向橋邊吹笛  
駐馬西望銷魂 (韋莊「清平樂」)

「已に老ゆ」が植物に対して使われる例もそう珍しくない。また「松杉」と熟する例もある。

・ 堂堂復堂堂 紅脫梅花香 (一作紅熟海梅香) 十年粉蠹生画梁 飢蟲不食推碎黃 蕙花已老桃葉長 禁院  
懸簾隔御光 華清源中譽石湯 裴回百 (一作白) 鳳隨君王 (李賀「雜曲歌辭」)

・ 松杉風外乱山青 曲几焚香对石屏 記得去年春雨後 燕泥時汚太玄經 (儲嗣宗「小樓」、『三体詩』)

「色あらたむ」は普通次のように松柏に使い、むしろ論語の意を汲んで「あらためず」と否定形で使うのが普通であることは、古詩の数々を引くまでもないだろう。

・ 歳寒無改色 年長有倒枝 (隋李德林「詠松樹」、『古詩紀』)

・ 河山不改色 天地自相雄 (明宗臣「上陵作」、『古今詩刪』)

鶻が生じる「生煙」もよくある表現で、前者は新樹に鶻が生じる例、後者は松柏に生じる例。

・ 黃公酒鐘処 青眼竹林前 故琴無復雪 新樹但生煙 邊痛蘭襟斷 徒令宝剑懸 客散同秋葉 人亡似夜  
川 送君一長慟 松台路幾千 (盧照鄰「哭明堂裴主簿」)

・ 萬井閭閻皆禁火 九原松柏自生煙 (郭雲「寒食寄李補闕」)

「家貧にして」も常套句で、「山陰の墅」も隱者たらんとする人の理想の別天地・別荘。また「林下の賢」だけで晋の竹林の七賢を指す例と、「芳年」が美しき青春時代を指す典型例も挙げておく。

・ 家貧禄既薄 儲蓄非有素 (王維「偶然作六首」)

…曲几書留小史家 草堂棋賭山陰墅…

(王維「同崔傅答賢弟」)

…世間益者成三友 林下賢人詠五君…

(明吳寬「葉翁以叢竹分種因題墨竹謝之」)

…曾經學舞度芳年…

(盧照鄰「長安古意」、『唐詩選』)

右のように、いかにも古文辭派詩人たちの親しんだ詩句の用例を連ねてはみたものの、たとえば竹と松杉の對比、竹の生煙、また市隱と山中隱士とのあわいに位置する吾が身の面白さ等は、この南郭詩独自の描写と捉えてよいのか否か判断に迷う。しかしながら、そこに次のような白居易の詩句を重ねていけばどうなるであろうか。

・昔我十年前 與君始相識 曾將秋竹竿 比君孤且直 中心一以合 外事紛無極 共保秋竹心 風霜侵不得  
始嫌梧桐樹 秋至先改色 不愛楊柳枝 春來軟無力 憐君別我後 見竹長相憶 長欲在眼前 故栽庭戶側  
分首今何処 君南我在北 吟我贈君詩 對之心惻惻

(白居易「酬元九對新栽竹有懷見寄(頃有贈元九詩云、有節秋竹竿、故元感之、因重見寄)」)

ここで季節節によって変化をきたす梧桐や楊柳に、いつまでも青々とした竹が対置されているのは、松杉と新竹を對比した南郭詩に類しているのとはより、「秋至れば先づ色改むるを」という文字使いまでも流入した可能性がある。また、竹が煙を生ずる白詩の例としては、

…梢動勝搖扇 枝低好挂冠 碧籠煙幕幕 珠灑雨珊珊…

(白居易「題盧祕書夏日新栽竹二十韻」)

が挙げられようか(この詩『唐宋詩醇』にも評あり)。「碧籠りて煙幕幕たり」というのは聊か繊細さに欠けるものの、新栽の竹に生氣が漲る様相を描いたものとして、やはり南郭に通ずるものがある。また、「酒薄」は、そもそも白居易愛用の詩語でもあったことを想起しなければならない。

…魯酒薄如水…

(白居易「雜感」)

…勿嫌村酒薄 聊酌論心素…

(白居易「村中留李三固言宿」)

…街東酒薄醉易醒 滿眼春愁銷不得

(白居易「長安春」)

また、市中と深山幽谷との中間的位置にありながら仙境に浸る、というこの詩の眼目たるべき趣向を感じさせるものとして、次のような白居易作もまた思い合わすことが出来るであろう。

・靄靄四月初 新樹葉成陰 動搖風景麗 蓋覆庭院深 下有無事人 竟日此幽尋 豈惟玩時物 亦可開煩襟  
時與道人語 或聽詩客吟 度春足芳色 入夜多鳴禽 偶得幽閒境 遂忘塵俗心 始知真隱者 不必在山林

(白居易「玩新庭樹因詠所懷」)

かく白詩のフィルターをかけて見直すことにより、古詩や樂府、唐明の格調詩のみでは掬い取れなかつた間隙を、時に補填しうることに気がついたのである。

3

いままで南郭詩の典拠として射程に入れることの躊躇されてきた白居易の字句が、意外に響き合う箇所は、まだある。

小莊栽竹乞諷訪侯移自西園既成篁叢賦此謝惠

小莊に竹を栽う。諏訪侯に西園より移さんことを乞ひ、既に  
篁叢成る。此れを賦して恵みに謝す。

欲遮村墅陋 村墅の陋を遮らんと欲して

移竹自侯園 竹を移すこと侯園よりす

猗緑還堪仰 還つて仰ぐに堪へたり

此君元且尊 此君 元と(且)尊し

生繁期鳳鳥 生繁 鳳鳥を期し

封殖護龍孫 封殖 龍孫を護す

早已催長嘯 早く已に長嘯を催して

清風幽意存 清風 幽意存す

小莊栽竹乞諏訪侯移自西園既成篁叢賦  
此謝惠

欲遮<sup>レ</sup>村墅<sup>ヲ</sup>陋<sup>ク</sup>移竹<sup>ヲ</sup>自侯園<sup>ヨリ</sup>猗緑<sup>ヲ</sup>還堪<sup>テ</sup>仰<sup>グ</sup>此君<sup>ノ</sup>元且<sup>ヲ</sup>尊<sup>シ</sup>  
生繁<sup>ク</sup>期鳳鳥<sup>ヲ</sup>封殖<sup>シ</sup>護龍孫<sup>ヲ</sup>早<sup>ク</sup>已<sup>ニ</sup>催<sup>シ</sup>長嘯<sup>ヲ</sup>清風<sup>ノ</sup>幽意<sup>ヲ</sup>存<sup>ス</sup>



前節で示した詩と同時期の五言律詩。これまた竹の詩だが、白賁墅に新栽の竹樹が、実は信濃諏訪侯（三万石、譜代、帝鑑間）の庭園から移されたものであることがここで明かされる。「諏訪侯」が当主であった六代諏訪忠厚なのか老侯忠林なのかは不明だが、近くの中渋谷に八千三百坪の下屋敷を持っており、これを「西園」と称したらしい。この竹を南郭が乞うて移植を許された謝礼として作られたのが、この五律であった。

そうした事情を勘案しつつも、その四句目、「此君もと（且）尊し」の句をどう訓めばよいかに苦しむ。はたして「元」「且」字のうまくおさまるような意の取り方があるのか。その際あるいは手掛かりになるかと思われるのが、やはり前節に引いた白居易新栽竹の長詩である。その歌い出しに「昔我れ十年前 君と始めて相ひ識り 曾て秋竹の竿をもつて 君が孤且つ直なるに比す」とあった。それにしてもこの四句目の「比君孤且直」の字の置き方は、南郭詩の「此君元且尊」に極似する。南郭にこの白詩句が頭をよぎった可能性はないか。

ここから二通りの想像がはたらく。第一には版本『南郭先生文集』における「此君」が、白詩と同様「比君」にすべきところを、竹に因んで「此君」と誤刻したのではないかということ。第二には、南郭自身の記憶における白詩句が「此君孤且直」と既にあやまたれていたのではないか、ということである。第一の想定は、当該句が対句の位置にあるということで、詩経衛風「淇奥」に由来するのであろう前句「猗緑」との対応上退けられねばなるまいが、第二の想像は僅かにありうべきもののように感じられる。白詩を「此君、孤にして且つ直なり」と解していた南郭が、藩侯から下賜された目前の新栽竹を「元」と「尊」とで形容した。その際の「元」は元首や

元勳と熟されるごとく、物事の大本の謂がふさわしい。よって訓は「此君、元にして且つ尊し」。別邸周囲の田舎臭さを覆い隠すために植えた竹が、それが堂々たる大名庭園から来たものであるせいか、単なる目隠しの役を越えて威風を放っているさまを、白居易が清廉孤独な生活をおくる友人元稹を竹に擬えた詩句とは対照的に詠じてみせた、ということになるのではあるまいか。

## 4

同時期の白賁墅の詩としては「西莊秋意」の連作六首があるが、後掲のような白詩の詩境が重ねられる。「復た何をか求めん」も白詩の愛用の語であった。

## 西莊秋意六首（其二）

荒園白賁独回頭	荒園	白賁	独り頭を回らす
跨跼唯憐一壑秋	跨跼	唯だ憐れむ	一壑の秋
鑿井得泉行自足	井を鑿ち泉を得て	行自ら足り	
立錫有地復何求	立錫	地有り	復た何をか求めん
風琴入坐松還奏	風琴	坐に入り	松還つて奏す
霜錦彌山楓自稠	霜錦	山に彌ねく	楓自ら稠る

年少豪華休謔笑

年少の豪華 謔に笑ふことを休めよ

孰如富貴似雲浮

富貴の雲浮に似たるに孰如れぞ

〔南郭先生文集〕四編卷二 \* 宝暦七年（七十五歳）

…且求容立錐頭地 免似漂流木偶人 但道吾慮心便足 敢辭湫隘與囂塵 （白居易「卜居」）

…終日一蔬食 終年一布裘 寒來彌懶放 數日一梳頭 朝睡足始起 夜酌醉即休 人心不過適 適外復何求 | （白居易「適意二首」（其一））

5

次の二首はほぼ同時期の作。その二首目を問題にしたいのだが、『南郭文集』の配列に従って参考までに両首とも掲げる。妙解院は品川東海寺の塔頭で、院主は大川義浚。しばしば南郭らとここで詩会を開くほど親しい間柄で、宝暦元年には、大徳寺三百五十七世となって京に赴く。のち東海寺における南郭葬儀においても導師を務めた。雨天つづきでなかなか遊びにも行けぬ、あるいは行けなかった謝辞を詩に述べる。

約遊妙解院諸君先至艸堂雨不果同賦簡大川尊者

約して妙解院に遊ぶ。諸君先づ艸堂に至るも雨にて果せず。

同じく賦して大川尊者に簡す。

此日朝来歎旧今 此日 朝来 旧今を歎ず

人間風雨隔東林 人間の風雨 東林を隔つ

只逢半道開杯酒 只だ半道 杯酒を開くに逢ひて

猶似蓮華社裏心 猶ほ蓮華社裏の心に似たり

冬初同諸君遊妙解精舎先是数約秋観値雨至今主人尊者有詩和以申志

冬初、諸君と同じく妙解精舎に遊ぶ。是より先、数しば秋観を約して雨に値ひ、今に至る。主人尊者詩有り。和して以て志を申す。

廬山同社問残秋 廬山の同社 残秋を問ふ

雨後空林落木愁 雨後の空林 落木愁ふ

唯有心期長不背 唯だ心期の長く背かざる有りて

白雲依旧入杯浮 白雲 旧に依り 杯に入りて浮ぶ

〔南郭先生文集〕四編卷三 \*寛延元年(六十六歳)

南郭がこの二首に意識して漂わせたのは、東晋時代、仏者慧遠が廬山の北の寺院で当代の賢者たちを集めて主催していた修養結社、白蓮社(蓮社ともいう)の風儀であろう。前首にみえる「東林」は慧遠の別号でもある。

またこの社では飲酒を許容していて、「蓮社高賢伝」（『漢魏叢書』所収）には、「遠法師與諸賢結蓮社、以書招淵明、淵明曰、若許飲則往、許之、遂造焉、忽攢眉而去」という逸話も載る。南郭詩の前首、結句の「蓮華社裏の心」というのは、その酒盃許可の風を指すことはいうまでもない。恐らくは大川尊者も葦酒山門に入るを許していたのであろう。その後首の典拠としては次のようなものを挙げる。

・ 師逢吳興守（一作寺） 相伴住禪局 春雨同栽樹 秋燈（一作風）對講經 廬山曾結社 桂水遠揚舩 話  
舊還惆悵 天南望柳星 （劉禹錫「贈別約師」）

・ 蕭蕭落葉送殘秋 寂寞寒波急暝流： （權德輿「舟行夜泊」）

・ 旧依支遁宿 曾與戴顓來 今日空林下 唯知見綠苔 （司空曙「過堅上人故院與李端同賦」）

・ 使君杯酒一登樓 依檻蕭條落木愁： （明王世貞「于鱗郡閣」、『古今詩刪』）

・ 道俗駢闐留不住 羅浮山上有心期 却愁仙処人難到 別後音書寄與誰

（施肩吾「贈別王鍊師往羅浮」、『万首唐人絶句』）

しかしながら、ここにもさらに白詩の用例を加えてみたくなる。

・ 九月徐州新戦後 悲風殺氣滿山河 唯有流溝山下寺 門前依旧白雲多 （白居易「乱後過流溝寺」）

戦乱に荒廢した山河を眺めつつ、そこだけは変わらぬ寺域に久しぶりに佇み、ひとときの安らぎを見出す、といった詩人のおかれた背景は相違するものの、「旧に依り」という表現をもって、その寺に久闊を叙したという点では共通する。「白雲」が仙仏の気を帯びた詩語であることはいうまでもないが、瑪瑙でも琥珀でもない、その白雲が酒杯にぽっかり浮かんでいるという趣向は、妙解院における宴飲を思い出しながらの、恐らくは独創に

かかるものであらう。

## 6

早春帰徳命駕余時遊江東不在壁上見留二詩和以寄謝（其一）

早春、帰徳の駕を命ずるも、余時に江東に遊びて在らず。

壁上に二詩を留めらる。和して以て謝を寄す（其二）

寒盡還蘇病後身

寒尽き 還て蘇る 病後の身

江東花鳥逐新春

江東の花鳥 新春を逐ふ

誰知張翰杯無恙

誰か知らん 張翰の杯 恙なきを

猶自生前混酒人

猶ほ 生前より酒人に混ず

〔南郭先生文集〕四編卷三 \*延享五（寛延元）年正月六十六歳作

これは『文会雜記』卷之一上に言及されていて、当時門下でも話題となっていた作らしい。但し第二句「新春」を「青春」に、末句「猶」を「転」に作る。作詩の時期も「己巳ノ春」（寛延二年春）としている。また帰徳（成島道筑）の名も「某」とおぼめかしているのは、道筑が幕臣なることを憚った所為でもあらうか。ここでは「江東の歩兵」と呼ばれた張翰が、秋風が吹くとともに故郷の呉の美味美酒を思い出すや、矢も楯もたまらず

帰郷した（『晋書』）、その姿にわが身を重ねる。題詞の「駕を命ず」も、『晋書』の表現で、我々もついその故事に目が行きがちであるが、「病後」「生前」などは白詩語ともいってよい字句であろう。とくに「病後」という題材は、白詩の場合、快癒後のやつれというよりも、病前にも増して活力に満ちるというパターンが多く、この詩とも響き合うのである。

…多因病後退 少及健時還…

（白居易「閒忙」）

・ 忽憶前年初病後 此生甘分不銜杯 誰能料得今春事 又向劉家飲酒來

（白居易「會昌元年春五絕句 病後喜過劉家（一作夢得）」）

…身後堆金拄北斗 不如生前一樽酒…

（白居易「勸酒」）

さらに白居易の病後詩には次のような例もあった。百日の禁酒のち、病が癒えるやいち早く酒壺をひっさげ友人を訪ねる詩人への親近感が、病後すぐ江東に看花して、心配する道筑と行き違いとなったおかしみがこの詩に結実したとも思えるのである。

・ 園杏紅萼坼 庭蘭紫芽出 不覺春已深 今朝二月一 去冬病瘡痂 將養遵醫術 今春入道場 清淨依僧律  
嘗聞聖賢語 所慎齋與疾 遂使愛酒人 停杯一百日 明朝二月二 疾平齋復畢 必須擊一壺 尋花覓韋七

（白居易「二月一日作贈韋七庶子」）

## 長安感懷三首（其二）

謾記南山卜隱時 謾に記す 南山 卜隱の時

重来佳処不勝思 重来す 佳処 思ふに勝へず

一丘一壑長如故 一丘一壑 長く故の如し

留得蕭条更待誰 蕭条を留め得たり 更に誰をか待たん

〔『南郭先生文集』四編卷三〕 \*延享二年（六十三歳）

これは南郭が延享二年の春から夏にかけて、四十九年ぶりに故郷京都の土を踏むことになった上方旅行時の作。十四歳で都を出て以来、初めての帰郷である。「更に誰をか待たん」と感傷にふけるものの、実はこの旅では畿内の名所古跡を訪ねることに主眼があつて、限られた日程のなかでは、ほとんど旧知を訪ねることをしなかつたことがかれの書簡に吐露されていた。

此度西游、日少、畿内辺名山川等略々歴覽仕度存意に付、兼て同伴申合、往來之道筋及京大阪等随分避人候て、密過仕候覚悟にて罷出候に付、道中京大阪共に相識之方皆々沙汰なしに罷過候躰…

（秋本澹園宛南郭書簡、早稲田大学図書館蔵、日野龍夫『服部南郭伝攷』平成十一年ぺりかん社刊所引）



しかしここであえて白居易に結び付ける誘惑に駆られてしまうのは、第三句「一丘一壑 長くもとの如し」。「一丘一壑」には「非吏非隱晋尚書 一丘一壑降乘輿」（劉憲「奉和聖製幸韋嗣立山莊」）など類例があるが、題は「長如故」である。

・玉芝觀裏王居士 服氣餐霞善養身 夜後不聞龜喘息 秋來唯長鶴精神 容顏盡怪長如故 名姓多疑不是真  
貴重榮華輕壽命 知君悶見世間人

（白居易「贈王山人」）

この「長如故」なる用字は他ではまったく見られぬもので、王山人の容貌の魁偉さと、懐かしい故山の勝景と、対象はきわめて相違しながらも、白詩の面白い文字遣いによって記憶していたものではあるまいか。

8

夏日閑居八首（其三）

短牆籬落混西東 短牆 籬落 西東混ず

夏木成陰空翠通 夏木 陰を成して 空翠通ず

坐見山童供灑掃 坐して見る 山童の灑掃に供すること

相憐野鳥遠樊籠 相憐れむ 野鳥の樊籠に遠ざかることを

不才昔学三冬史 不才 昔学ぶ 三冬の史

垂死今余一畝宮 死に垂んとして 今余す 一畝の宮

独為静虚堪勝熱 独り静虚の熱に勝るに堪へたるが為に

当風不必問雌雄 風に当りて 必ずしも雌雄を問はず

〔南郭先生文集〕三編卷三 \*延享元年夏六十二歳作

典拠とおぼしい幾多の古詩格調詩の類例は省略する。夏の暑氣と閑静な心境、そして「己が「不才」と市中の

「一畝宮」を詠じた白詩の例を挙げておこう。

・水積春塘晚 陰交夏木繁 舟船如野渡 籬落似江村 静扞琴床席 香開酒庫門

慵閒無一事 時弄小嬌孫

〔白居易〕池上早夏〕

・…春禽餘晝在 夏木新陰成 兀爾水邊坐 翛然橋上行 自問一何適 身閒官不輕

料錢隨月用 生計逐日營…

〔白居易〕首夏〕

・聖代元和歳 閒居渭水陽 不才甘命舛 多幸遇時康…

〔白居易〕渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻〕

・歳去年來塵土中 眼看變作白頭翁 如何辦得歸山計 兩頃村田一畝宮

〔白居易〕詠懷〕

なお、この八首の連作では「病來」「未全貧」「小池」「游魚」「孟夏」「昏時」「慚愧」など、白居易の愛用した語、もしくは白詩に典拠を求めるのが妥当な語が散見するが、これらの詳細については他日の検討に期す。

漫然と、いわば断章風に事例を挙げて来たが、小稿ではこのくらいにしておきたい。それでも日野龍夫の指摘とは全く別趣の受容が、ここに見えてくるであろう。「長恨歌」の影響下に南郭が「小督詞」を残したことは紛れもない事実としても、そうした長詩のもつ叙事性をおのが日常的詩法の糧としようとしたのではなかった。「小督詞」は、南郭の広汎な作詩活動においてはむしろ特殊な例であり、叙事への関心とその成果としてはむしろ散文の『大東世語』（寛延三年刊）に指を屈するべきではあるまいか。見てきたように彼は白詩のもつ風趣を、古詩や唐明の格調詩を典拠とする表現の合間に、いわば隠し味のように用いていたふしがある。まさに、典拠を露骨に表さぬ白詩の「絶伎」を自ら実践するがごとくに。豪壮華麗、悲憤激烈な格調詩風の語彙は、その場合に限って心なしか後退の気味があった。

知られているように白居易は、自らの詩作を諷論、閑適、感傷、雑律に分類している。そのなかで南郭に最も遠い要素が諷論であろうことは予見できそうだが、しかしながら実際は、そうした部立てにほとんど拘わる事なく、白氏文集のあちこちから字句や描写が抽出され、作品のなかでそれらが様々に変化させられて顔をのぞかせたことは、南郭が白詩を、そうした分類意識とはまた別途の尺度で取り入れようとしていた証なのである。

南郭の白詩句を利用すること、それは日野氏によって延享初年と推定された「小督詞」制作のあたりから顕著になるごとくであった。この時期白氏文集を集中的に読みなおしたのか、あるいは還暦を過ぎ肉体の衰えとともに

に、盛唐詩風の高揚した調べのみでは己が心の襞を覆えぬと感得したのか、それは不明である。しかし私情や心理を直叙することは野蛮人のいとなみに等しいとするかれの詩論（『南郭先生燈下書』）からすれば、盛唐詩風を保ちつつも、ほどよく精神の高貴な平穩さを描くに、中唐白居易の詩句がかれの生理と合致するところがあつたとするのは、そう奇異な想像ともいえない。前節までの作例をみても、白居易が見え隠れするのは平靜な詩境のときが圧倒的に多いのである。格調詩風のよさはそれとして自作に堅持しつつも、時にそれをおさめる鎮靜剤としての効能を、かれは白詩にみていたと言い換えてもよいであらう。

よつて南郭の白詩受容を考えるために、私はここにもう一つの尺度の導入を提示したい。『文会雜記』に「南郭ハモト歌人ナリ。歌ト画ノ芸ヲ以テ、故甲斐侯吉保ニ仕ヘラレタリ。ソレヨリ詩ヲ学ビ文ヲカキテ、徠翁ニ從ヒタマヘリ。ソレユヘ和書ハヨクヨミタル人也」（卷之一上）と湯浅常山の証言するように、なによりも南郭は和歌から文に手を染め始めた人であつた。文事の基底にはたえずその感覚があつたらしいことを考えれば、わが国の文学史からみて和歌と手を携えてきた白詩の表現は、かれにとつていわばおのが芸文の原風景として眺められる存在でもあつたらう。すなわち南郭詩の味読には和歌の尺度を持ち込むべきかと考えるのである。明の古文辞派からの影響が言われてきた徠翁や南郭の擬古主義の姿勢に、中世歌論ないし堂上和歌の理論や方法との親和性がみられることはかつて指摘したことがあるが、実作においてそれを具体的に物語るのが南郭の白詩利用だったのではなからうか。

しかしそれはなかなか複雑な回路を潜めた受容でもある。古今集以後の和歌自体が既に白詩に生まれ、影響され、さらに長い時間をかけて反発や融合を繰り返しながら築き上げられた和歌世界のその延長上に、近世中期

の文人服部南郭は生きた。そのかれが歌人としての感性を帯しながら白詩を読むという行為はいかなる意味をもっていたのか。南郭からすれば、和歌的叙情の母体として白詩を受容していたといえそうであるが、これを文字上に立証することは一見簡単そうで、存外に困難を伴うに違いない。続稿の課題は一にそのことに尽きる。

\*本稿は平成二十九年五月十九日国際東方学者会議における口頭発表の内容を含んでいる。